

# 井原西鶴の『万の文反古』の文体分析

上阪彩香<sup>†1</sup> 村上征勝<sup>†2</sup>

西鶴の著した作品は、日本文化の根幹をなす歴史的古典籍とされているが、没後 320 年になる今日においても西鶴作とされる浮世草子には、西鶴作かどうか疑惑が解明されていない作品も多く存在する。西鶴の第 4 遺稿集『万の文反古』も著者に関する疑惑が出されている作品のひとつである。本研究では、文章の計量的な分析により『万の文反古』の著者の疑問を検討する。

## The analysis of "Yorozu no humihougu" written by Saikaku Ihara

AYAKA UESAKA<sup>†1</sup> MASAKATSU MURAKAMI<sup>†2</sup>

It's said that the works of Saikaku Ihara is one of the main influences for most proceeding novels in Japan. He died 320 years ago, but a lot of problems have been left unresolved. This study focuses on "Yorozu no humihougu" which has authorship problems. We used for analyzing the tools of quantitative analysis.

### 1. 研究目的

江戸時代前期の作家井原西鶴（1642?～1693）は、多数の浮世草子を残している。しかし、これらの浮世草子に関して、処女作『好色一代男』のみが西鶴の手によるものであるとする森銑三の西鶴論[1]をはじめとして、西鶴作品に著者に関する疑問が出されている。

これらの問題に関しては、言うまでもなく国文学や国語学の領域において、記述内容の詳細な検討や成立に関する歴史的考証が続けられてきてはいるが、このような領域の研究手法とは、異なる観点から接近することにより、いまだ解明されていない西鶴作品の著者への疑問に関して、新たな知見が得られる可能性が考えられる。

本研究の目的は、西鶴の浮世草子の中でも西鶴の死後に編集、出版されたことから筆者について問題にされることの多い遺稿集を取り上げ、その中でも第 4 遺稿集として出版された 17 章の短編からなる書簡体小説種である『万の文反古』の著者の疑問に関し、文章データの数量分析という観点から検討を行うことにある。

### 2. 先行研究

西鶴の遺稿集として出版された作品は、以下の 5 作品である。

第 1 遺稿集	『西鶴置土産』	元禄 6 年刊 (1693)
第 2 遺稿集	『西鶴織留』	元禄 7 年間 (1694)
第 3 遺稿集	『西鶴俗つれづれ』	元禄 8 年刊 (1695)
第 4 遺稿集	『万の文反古』	元禄 9 年刊 (1696)
第 5 遺稿集	『西鶴名残の友』	元禄 12 年刊 (1699)

これらの作品は、西鶴が生前に執筆したとされる未発表の草稿を元禄 6 年（1693）から元禄 12 年（1699）にかけて、西鶴の門下である北条団水らが編集し、出版したものである。しかしながら、遺稿集は西鶴の没後、出版されていることから他作者説や補作・補筆・修正・擬作などの疑問が出されている。

#### 2.1 山口氏による『万の文反古』への問題提起

西鶴作かどうかを検討する際には、版下の文字やさし絵が西鶴の手によるものかどうかの問題となる。

山口剛[2]は、『万の文反古』に対し、以下の点から門人である北条団水の偽作かと述べている。

①版下は西鶴に似ているが、無理な力を籠めてやや線が太く、やや丸みを欠いているようである。

②さし絵も西鶴の旧著と類似の構図を持つ物が多い。

③ほかの 4 つの遺稿集にある団水の序文が『万の文反古』にはない。

④第 4 遺稿集である『万の文反古』の版元は、第 2 遺稿集の『西鶴織留』と同じ大坂雁金屋庄左衛門・京都上村平左衛門・江戸万屋清兵衛である。同じ版元から出版されているにも関わらず、未定稿の部分がある『西鶴織留』よりも完全なかたちを持っている『万の文反古』の方が後に出版されたのは、何故なのかという疑問がある。

⑤全 17 章の中には、西鶴の作品もあるが、団水が師の旧著のあるものをぬいて前後首尾を加除しながら書簡体書き換えたと思われるものも混じっている。各章につけた註解がましい言葉はかえって趣をそいで、すべて団水の補筆であろうと考えられる。

## 2.2 全てを西鶴の手による説

暉峻康隆 [3] は、版下が西鶴の筆跡であるとし、問題にされてきたところは西鶴の作品であることを否定する決定的な条件ではなく、作品中に西鶴以外には求められない思想があることなどを理由とし、『万の文反古』を西鶴作であると述べている。

## 2.3 中村氏による問題の再提起

中村幸彦[4]は『万の文反古』の問題に関し、再提起を行った。版下が西鶴の筆跡であることが、西鶴の作品であることの要因の一つとなっていたが、筆跡に関して西鶴のものでなく『丹波太郎物語』の筆者の筆跡だと判断している。そして、筆跡が西鶴のものでないとすると、全ての章を西鶴作であると考えた必要性がなくなったとして、『万の文反古』の章のうちの多くは西鶴の作品であろうが、西鶴作でない章も含まれているという結論をだした。

以上のように、多くの研究が行われてきているが『万の文反古』の著者についてはいまだ決着がついていない。

## 3. 品詞情報に基づく計量分析

### 3.1 分析に用いた底本及びデータベース

本研究では『新編西鶴全集』(浅野, 2000) [5]を底本として西鶴 23 作品(表 1)の全文章に形態素解析にほどこした 578,617 語からなるデータベース(新編西鶴全集データベース)を用いる。このデータベースは『新編西鶴全集』の編者と共同で構築されたもので、現時点では計量分析可能な唯一の西鶴作品のデータベースであり、かつ、国語学、国文学の観点から見ても非常に信頼度の高いものである。

表 1 データベース収録作品(語数)

作品名	作品名	作品名
好色一代男 (37,480)	諸艶大鑑 (46,985)	好色五人女 (20,562)
好色一代女 (27,542)	西鶴諸国はなし(17,024)	本朝二十不孝 (18,778)
男色大鑑 (51,775)	武道伝来記 (49,543)	好色盛衰記 (21,337)
懐硯 (23,250)	日本永代蔵 (30,052)	色里三所世帯 (12,234)
武家義理物語(22,146)	嵐は無常物語 (8,730)	新可笑記 (25,631)
本朝桜陰比事(27,283)	世間胸算用 (21,658)	浮世栄花一代男(23,119)
西鶴置土産 (18,161)	西鶴織留 (30,298)	西鶴俗つれづれ(14,797)
万の文反古 (17,453)	西鶴名残の友 (12,779)	

このデータベースに準拠した場合、23 作品の総語彙数は 578,617 語であり、最も長い作品は『男色大鑑』で 51,775 語、最も短い作品は『嵐は無常物語』で 8,730 語である。

表 2 は、分析に用いたデータベースの一部(『万の文反古』巻 1 の冒頭)である。

表 2 『万の文反古』の冒頭部分

作品名	巻	本文	品詞	活用形	ルビ	現代がな終止	現代がな活用
万古	巻一	世帯	名詞		セタイ	せたい	せたい
万古	巻一	の	助詞		△	の	の
万古	巻一	大事	名詞		ダイジ	だいじ	だいじ
万古	巻一	は	助詞		△	は	は
万古	巻一	正月仕舞	名詞		△	しゅうがつじまい	しゅうがつじまい
万古	巻一	十二月九日	名詞		△	じゅうにがつこのか	じゅうにがつこのか
万古	巻一	の	助詞		△	の	の
万古	巻一	書中	名詞		シヨチュウ	しゅちゅう	しゅちゅう
万古	巻一	、	句読点		△	、	、
万古	巻一	伊勢屋十左衛門	名詞		イセー	いせやじゅうざえもん	いせやじゅうざえもん
万古	巻一	船	名詞		フネ	ふね	ふね
万古	巻一	、	句読点		△	、	、
万古	巻一	十二日	名詞		△	じゅうににち	じゅうににち
万古	巻一	に	助詞		△	に	に
万古	巻一	くだりにつき	動詞	連用	△	くだりにつき	くだりにつき

### 3.2 『万の文反古』と 22 作品との比較分析

西鶴の処女作である『好色一代男』以外の作品は必ずしも西鶴作とされているわけではないが、最初に第 4 遺稿集『万の文反古』と「新編西鶴全集データベース」に収録されている 22 作品を文体に関する基本的な情報である品詞の出現率を用いて比較してみる。

「新編西鶴全集データベース」に準ずると、23 作品に出現する品詞は、名詞・助詞・動詞・助動詞・副詞・形容詞・接頭語・連体詞・接続詞・形容動詞・感動詞・連語・接尾語・補助動詞の 14 品詞である。分析にはこの 14 品詞の中から出現頻度の高い上位 7 品詞(名詞・助詞・動詞・助動詞・形容詞・副詞・連体詞)の出現率を用いた。分析に用いる品詞数を 7 としたのは、出現頻度が上位から 7 番目の連体詞と 8 番目の接続詞では出現率が大きく異なること、また章単位で見ると 8 番目の接続詞から出現数 0 の章が多くなったことによる。

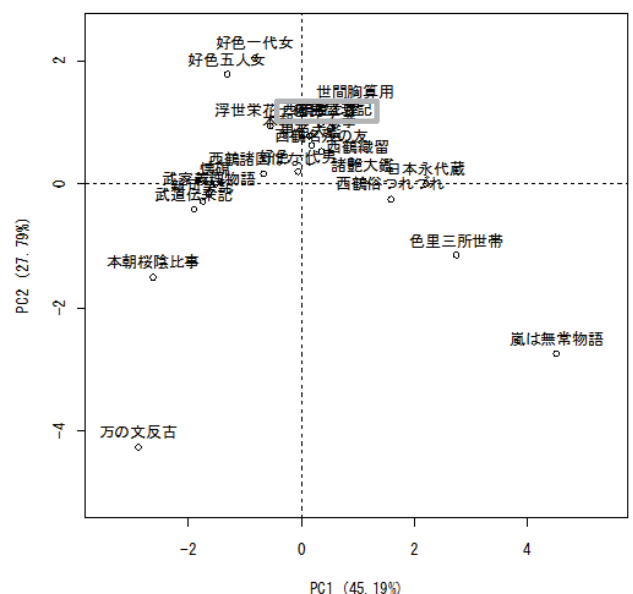


図 1 23 作品の主成分分析(相関行列)

図1は、7品詞の出現率を用いた主成分分析(相関行列)結果で、横軸は第一主成分、縦軸は第二主成分である。

表3 23作品の主成分ベクトル

	PC1	PC2	PC3	PC4	PC5	PC6	PC7
名詞	0.47	-0.26	0.21	-0.41	0.40	-0.19	-0.55
助詞	0.37	0.46	0.04	0.58	-0.28	-0.15	-0.46
動詞	-0.37	-0.44	-0.37	-0.03	-0.42	0.14	-0.58
助動詞	-0.35	0.44	0.39	-0.17	0.17	0.61	-0.33
形容詞	-0.05	0.57	-0.40	-0.61	-0.19	-0.33	-0.05
副詞	-0.51	0.09	-0.19	0.31	0.62	-0.42	-0.19
連体詞	-0.34	-0.07	0.68	-0.09	-0.37	-0.52	-0.02
寄与率	45.19	27.79	17.23	6.01	2.22	1.49	0.07
累積寄与率	45.19	72.98	90.21	96.22	98.44	99.93	100

表3に主成分ベクトルを示した。これを見ると、名詞・助詞の出現率が大きくなると第一主成分の値は大きくなり、反対に副詞・動詞・助動詞・連体詞・形容詞の出現率が大きくなると第一主成分の値は小さくなる。また第二主成分の値は、形容詞・助詞・助動詞の出現率が大きくなると大きくなり、動詞・名詞の出現率が大きくなると小さくなる。また第二主成分の値は、形容詞・助詞・副詞の出現率が大きくなると大きくなり、名詞・動詞・連体詞の出現率が大きくなると小さくなる。

前述のように、『好色一代男』は西鶴の作品として間違いない作品であると考えられているので、主成分分析で図1の□で囲まれた部分に示されている『好色一代男』から離れて示された作品は、7品詞の出現率では西鶴作品とは異なった特徴を持っていると考えられる。

このことから、『好色一代男』から離れたものについて検討すると、図1においては『万の文反古』、『嵐は無常物語』が離れており、『色里三所世帯』、『本朝桜陰比事』も比較的離れている。これは、第二主成分の値が小さいためである。

また西鶴の死後、門下の団水らによって編集、出版された遺稿集については、5作品すべてまとめて位置するわけではなく、『万の文反古』だけは他の4つの遺稿集(『西鶴置土産(1693)』『西鶴織留(1694)』『西鶴俗つれづれ(1695)』『西鶴名残の友(1699)』)と離れて位置していることが読み取れる。

次に、より詳細に検討を行うために各作品を章に分割し、章を個体(分析単位)として分析する。

これは、西鶴の作品が一般的に章単位の短編の集まりであるとされていること、また西鶴作か西鶴作でないのかといった著者同定に関して、先行研究において章単位で議論されているためである。

図2は、各作品を章ごとに分割した上位7品詞の出現率を主成分分析(相関行列)で分析した結果である。図2において、実線の左下に『万の文反古』が位置しており、実線の右上に『万の文反古』以外の遺稿集が位置している。

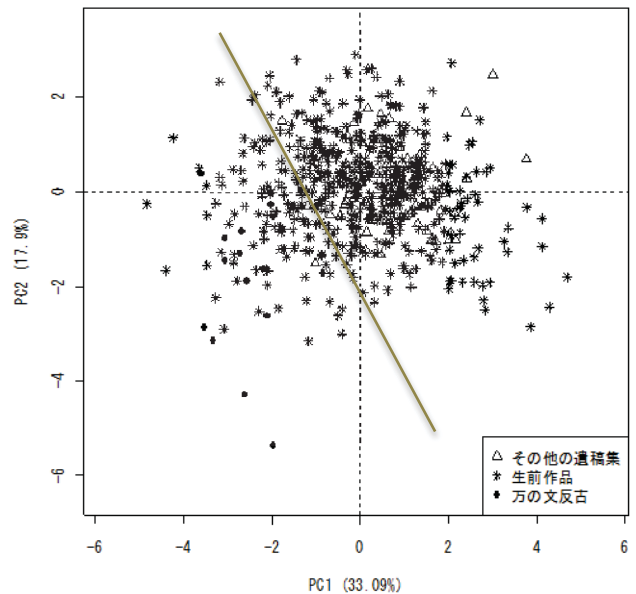


図2 23作品の主成分分析(相関行列)

表4に主成分ベクトルを示した。これを見ると、名詞・助詞の出現率が大きくなると第一主成分の値は大きくなり、反対に動詞・副詞・助動詞・連体詞の出現率が大きくなると第一主成分の値は小さくなる。また第二主成分の値は、形容詞・助詞・副詞の出現率が大きくなると大きくなり、名詞・動詞・連体詞の出現率が大きくなると小さくなる。

表4 品詞の主成分ベクトル

	PC1	PC2	PC3	PC4	PC5	PC6	PC7
名詞	0.49	-0.47	-0.13	0.35	-0.11	0.21	0.59
助詞	0.38	0.47	0.16	-0.62	0.07	0.12	0.45
動詞	-0.44	-0.13	0.58	0.09	0.20	-0.39	0.51
助動詞	-0.39	0.02	-0.50	-0.22	-0.61	-0.25	0.33
形容詞	0.08	0.62	-0.34	0.54	0.28	-0.29	0.19
副詞	-0.43	0.29	0.13	0.24	-0.14	0.78	0.17
連体詞	-0.30	-0.26	-0.49	-0.28	0.69	0.19	0.16
寄与率	33.09	17.90	16.97	12.32	10.33	8.98	0.4
累積寄与率	33.09	50.99	67.96	80.28	90.61	99.59	100

### 3.3 『万の文反古』と遺稿集4作品との比較分析

前節の主成分分析より作品単位でも、章単位でも『万の文反古』は他の遺稿集と7品詞の出現率が異なっているという結果が出ているので、次に『万の文反古』以外の4作品をその他の遺稿集として一つにまとめ、『万の文反古』とその他の遺稿集との品詞の出現率を検討する。

図3は上位7品詞の出現率をボックスプロット(箱ひげ図)で示したものである。ボックスプロットでは、箱の中の線が中央値で箱の中にデータの50パーセント、つまりこの場合では分析に用いた章の50パーセントがはいっている。箱から上下に伸びたひげであるが、上に伸びたひげはデータの最大値、下に伸びたひげはデータの最小値を表している。

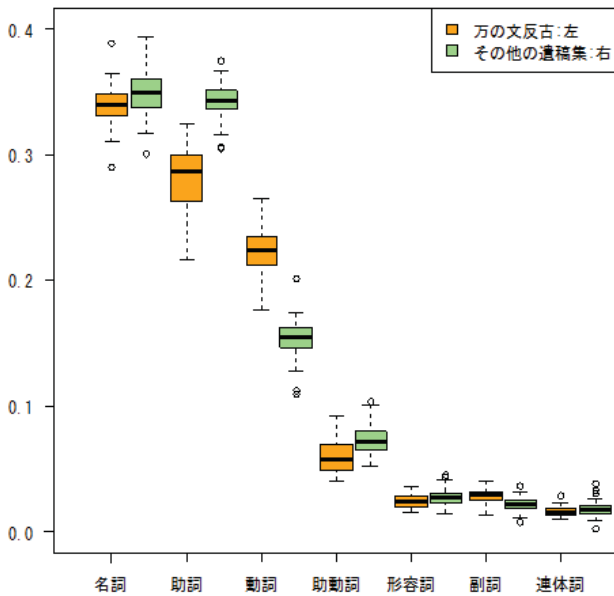


図3 『万の文反古』とその他の遺稿集のボックスプロット

『万の文反古』とその他の遺稿集の品詞の出現率を比較してみると助詞と動詞に大きな差がみられる。そこで、ウェルチの t 検定を用いて、『万の文反古』とその他の遺稿集の出現率に差はないとする仮説の検定を有意水準 0.05 で行ってみると、助詞の場合 p 値は 3.217E-08、動詞の場合 p 値は 6.225E-11、助動詞の場合 p 値は 0.001555、副詞の場合 p 値は 0.001407 となり、この 4 品詞に関しては出現率に差はないとする仮説は棄却される。これ以外の 3 品詞（名詞・形容詞・連体詞）に関しては、p 値は名詞 0.07717、形容詞 0.06828、連体詞 0.3514 となり出現率に差はないとする仮説を棄却することはできない。

次に章単位で分析を行う。7 品詞の出現率の情報から、『西鶴置土産』15 章、『西鶴織留』23 章、『西鶴俗つれづれ』18 章、『万の文反古』17 章、『西鶴名残の友』27 章の 100 の章の類似関係を調べてみる。

図 4 は、上位 7 品詞の出現率を主成分分析（相関行列）で分析した結果である。主成分寄与率は第一主成分では 33.57%、第二主成分で 20.37% であり、第二主成分までの累積寄与率は 53.94% である。

『万の文反古』の 17 の章とその他の遺稿集の 83 の章が位置する範囲を線で囲ってみると、『万の文反古』の 17 章の文章はその他の遺稿集の 83 の章とは少し異なったところに位置されており、章ごとにみても『万の文反古』の各章とその他の遺稿集の章では 7 品詞の使用率は異なった特徴を持っていると考えられる。

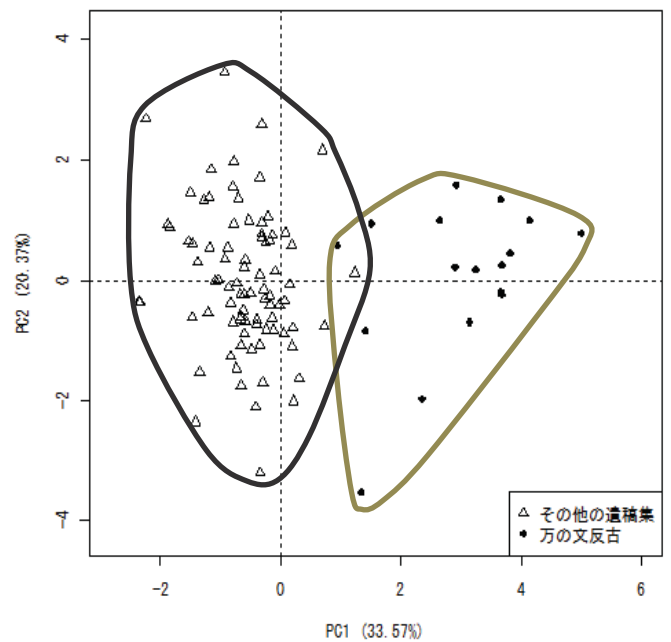


図4 『万の文反古』とその他の遺稿集の主成分分析（相関行列）

表 5 に主成分ベクトルを示した。これを見ると、動詞・副詞の出現率が大きくなると第一主成分の値は大きくなり、反対に助詞・助動詞・形容詞・名詞・連体詞の出現率が大きくなると第一主成分の値は小さくなる。また第二主成分の値は、名詞・形容詞の出現率が大きくなると大きくなり、助動詞・連体詞・副詞の出現率が大きくなると小さくなる。

表 5 品詞の主成分ベクトル

	PC1	PC2	PC3	PC4	PC5	PC6	PC7
名詞	-0.16	0.70	0.25	-0.06	0.51	0.10	0.39
助詞	-0.54	-0.04	-0.19	0.28	-0.44	0.38	0.51
動詞	0.62	-0.07	0.12	-0.03	-0.25	-0.25	0.69
助動詞	-0.28	-0.60	0.02	0.20	0.58	-0.31	0.29
形容詞	-0.25	0.15	-0.58	-0.58	-0.07	-0.46	0.12
副詞	0.37	-0.12	-0.59	-0.08	0.37	0.59	0.11
連体詞	-0.13	-0.34	0.44	-0.73	-0.03	0.36	0.10
寄与率	33.57	20.37	16.07	13.74	8.9	7.04	0.3
累積寄与率	33.57	53.94	70.01	83.75	92.65	99.69	100

図 4 では、『万の文反古』の 17 章はいずれも図の右側に付置しており、これに対してその他の遺稿集の 83 の章は作品単位で図の左側に付置している。したがってこのことから、『万の文反古』は、動詞・副詞の出現率が高く、その他の遺稿集では、名詞・助詞・助動詞・形容詞・連体詞の出現率が高いことが分かる。

上位 7 つ品詞の出現率を主成分分析にかけた結果(図 4) をみると、『西鶴置土産 (1693)』『西鶴織留 (1694)』『西鶴俗つれづれ (1695)』『西鶴名残の友 (1699)』の 4 つの遺稿集は似た特徴を示したが、『万の文反古 (1696)』は他の遺稿集に比べて特に、動詞の出現率が多く、助詞の出現率が少ないという特徴を示した。

### 3.4 『万の文反古』と『好色一代男』との比較分析

ここまでは、「新編西鶴全集データベース」に収録されている23作品のなかでの『万の文反古』の位置づけ、及び遺稿集の中での『万の文反古』の位置づけについて考えてきた。この節では、『万の文反古』が西鶴作か否かを検討するために、西鶴作であることが確実な『好色一代男』の文章と『万の文反古』の文章と比較検討を行う。

この比較検討においても、2作品（『好色一代男』と『万の文反古』）を章に分割し、章を個体（分析単位）として分析する。『万の文反古』は17章で、『好色一代男』は54章よりなる。

図5は、上位7品詞の出現率をボックスプロット（箱ひげ図）で示したものである。この図から『万の文反古』と『好色一代男』とでは、助詞と動詞の2品詞に関しては、出現率に大きな差が見られる。

実際にウェルチのt検定を用いて、『万の文反古』と『好色一代男』の出現率に差はないとする仮説の検定を有意水準0.05で行ってみると、助詞の場合p値は4.04E-10、動詞の場合p値は3.38E-10となり、出現率に差はないとする仮説は棄却される。視覚的には明確でなかったが、形容詞においてp値が0.02434となりウェルチのt検定で出現率に差があるということが分かった。他の5品詞に関しては、p値は名詞0.1891、助動詞0.06361、副詞0.07442、連体詞0.827となり出現率に差はないとする仮説は棄却できない。

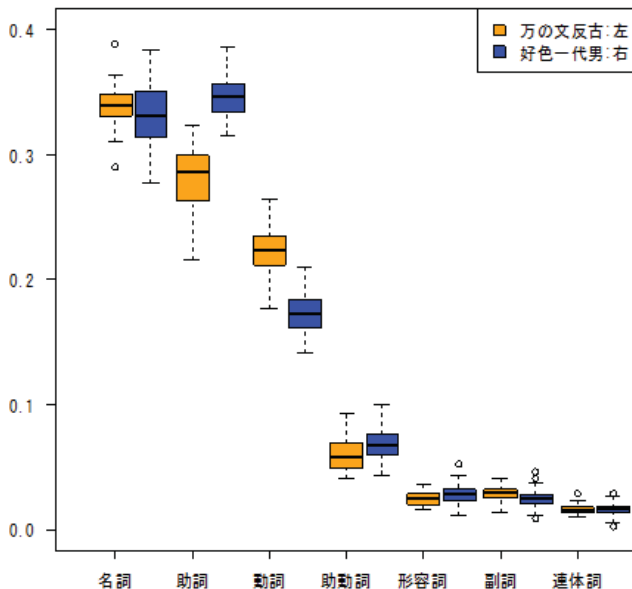


図5 『万の文反古』と『好色一代男』のボックスプロット

次に7品詞の出現率の情報から、分析に用いた71の章（『万の文反古』17章、『好色一代男』54章）の類似関係を調べてみる。

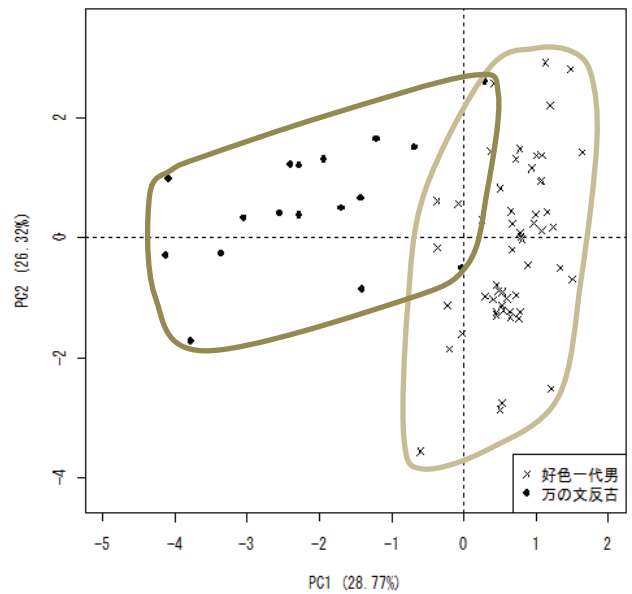


図6 『万の文反古』と『好色一代男』の主成分分析（相関行列）

図6は主成分分析（相関行列）の結果である。この図で、『万の文反古』の17の章と『好色一代男』の54の章が位置する範囲を線で囲ってみると、71の章が、全くのバラバラに位置するのではなくて、『好色一代男』の54章と『万の文反古』の17章はそれぞれの作品ごとにある程度のまとまっていることがわかる。

表6に主成分ベクトルを示した。これを見ると、助詞・形容詞・助動詞の出現率が大きくなると第一主成分の値は大きくなり、反対に動詞・名詞の出現率が大きくなると第一主成分の値は小さくなる。また第二主成分の値は、副詞・連体詞・動詞・助動詞・形容詞の出現率が大きくなると大きくなり、名詞・助詞の出現率が大きくなると小さくなる。

表6 品詞の主成分ベクトル

	PC1	PC2	PC3	PC4	PC5	PC6	PC7
名詞	-0.25	-0.59	0.21	-0.05	-0.26	-0.53	0.45
助詞	0.62	-0.17	-0.01	0.06	0.47	0.15	0.58
動詞	-0.61	0.27	-0.10	0.09	0.02	0.43	0.60
助動詞	0.27	0.23	-0.70	-0.19	-0.51	-0.19	0.24
形容詞	0.33	0.23	0.56	0.30	-0.61	0.20	0.15
副詞	-0.04	0.56	0.08	0.40	0.28	-0.65	0.11
連体詞	0.03	0.36	0.37	-0.83	0.08	-0.11	0.13
寄与率	28.77	26.32	15.73	12.26	9.25	7.26	0.42
累積寄与率	28.77	55.09	70.82	83.08	92.33	99.59	1

図6では、『万の文反古』の17の章はいずれも図の左側に付置しており、これに対し『好色一代男』の54の章は図の右側に付置している。したがってこのことから、『万の文反古』は、動詞・名詞・副詞の出現率が高く、『好色一代男』では、助詞・形容詞・助動詞・連体詞の出現率が高いといえる。

#### 4. 単語情報に基づく計量分析

ここまでの節では、品詞の出現率を用いて、主として『万の文反古』の著者問題に関して、計量的な観点から分析を行った。

その結果、『万の文反古』では、『好色一代男』やその他の遺稿集に比べて動詞の出現率が高いという結果が得られ、助詞の出現率においては、『万の文反古』は『好色一代男』やその他の遺稿集と比べて低いという結果が得られている。そこでこの節では、品詞の出現率を用いた分析において特に差がみられた動詞・助詞のなかでもどのような語彙が各々の作品において特徴的に使用されているのかを2つにグループの平均値の差に関する検定（ウェルチの検定）を用いて調べる。

##### 4.1 遺稿集における語彙の用いられ方の違い

動詞の出現率と助詞の出現率の高い語彙に関し、『万の文反古』とその他の遺稿集において、語彙の出現率に差があるかどうかをウェルチのt検定で調べた。分析には、動詞の1,625種類(15,113語)のうち出現語数が51以上の語彙47種類(8,055語)について、語彙の各々についてウェルチの検定を行った。助詞についても同様に53種類(29,994語)のうち出現語数が51以上の語彙31種類(29,842語)の語彙の各々についてウェルチの検定を行った。p値が小さいもの(0.05以下、帰無仮説が棄却され『万の文反古』とその他の遺稿集で出現率に有意な差がみられる語)から10語を考察をする(表7)。

表7をみると、『万の文反古』で出現頻度の高い語彙は「そうろう・もうす・ござそうろう」であり、他の遺稿集で出現頻度の高い語彙は「す・いう・なる・あり・ゆく・すむ・たまう」であるということがわかる。このことから、『万の文反古』では、敬語（尊敬語・丁寧語・謙譲語）が特徴的な語彙であるということが考えられる。

表7 動詞におけるウェルチの検定

	p値	t値
す	2.2.E-16	13.40
いう	2.2.E-16	13.70
そうろう	1.2.E-12	-18.82
もうす	1.9.E-10	-13.20
なる	2.1.E-10	7.66
あり	6.3.E-08	6.81
ござそうろう	2.9.E-06	-6.98
ゆく	7.3.E-06	4.87
すむ	7.3.E-06	4.74
たまう	9.5.E-06	4.67

(注：t値がプラスの語彙はその他の遺稿集で特徴的に用いられている)

次に助詞の語彙(表8)では、『万の文反古』で出現頻度の高い語彙は「へ・ばかり・に・にて・は」であり、他の遺稿集で出現頻度の高い語彙は「ぞ・て・ど・かし・とて」であるということがわかった。

表8 助詞におけるウェルチの検定

	p値	t値
ぞ	5.2.E-09	6.97
て	7.1.E-06	5.83
ど	3.0.E-05	4.42
かし	5.3.E-04	3.83
とて	8.6.E-04	3.60
へ	1.0.E-03	-3.92
ばかり	3.6.E-03	-3.25
に	4.4.E-03	-3.09
にて	5.2.E-03	-3.17
は	8.5.E-03	-2.93

(注：t値がプラスの語彙はその他の遺稿集で特徴的に用いられている)

##### 4.2 『万の文反古』と『好色一代男』における語彙の違い

動詞の出現率と助詞の出現率の高い語彙に関し、『万の文反古』と『好色一代男』において、語彙の出現率に差があるかどうかを調べた。分析には、動詞の1,285種類(10,145語)のうち出現語数が51以上の語彙35種類(5,179語)について、語彙の各々についてウェルチの検定を行った。助詞についても同様に57種類(17,505語)のうち出現語数が51以上の語彙26種類(17,258語)の語彙の各々についてウェルチの検定を行った。p値が小さいもの(0.05以下)から10語について考察を行う(表9)。

表9 動詞におけるウェルチの検定

	p値	t値
いう	1.3E-11	8.40
はべり	7.1E-11	8.12
そうろう	1.0E-10	-13.29
あり	1.9E-09	7.25
もうす	2.2E-08	-9.12
ゆく	9.9E-07	5.40
ござそうろう	5.6E-06	-6.62
す	5.6E-06	4.97
かたる	1.1E-05	4.74
きく	2.3E-05	4.55

(注：t値がプラスの語彙はその他の遺稿集で特徴的に用いられている)

表9をみると、『万の文反古』では「そうろう・もうす・ござそうろう」の出現率が高く、『好色一代男』では「いう・はべり・あり・ゆく・す・かたる・きく」の出現率が高いということがわかった。この結果からも『万の文反古』では、敬語が特徴的な語彙であるということが考えられる。

表10をみると、助詞では『万の文反古』において「にて・に・へ・ばかり・は」の出現率が高いという結果を得た。それに対して、『好色一代男』では、「ぞ・て・こそ・と・かし」の出現率が高いという結果を得た。

この分析結果から、『万の文反古』は『好色一代男』に比べて異なった語彙が用いられているという結果を得た。

表 10 助詞におけるウェルチの検定

	p値	t値
ぞ	1.9E-11	8.08
て	1.6E-10	10.44
こそ	1.9E-06	5.21
と	9.1E-06	5.72
かし	9.7E-06	4.82
にて	3.0E-05	-5.61
に	3.4E-05	-4.95
へ	2.1E-03	-3.52
ばかり	4.0E-03	-3.19
は	5.1E-03	-3.14

(注：t 値がプラスの語彙はその他の遺稿集で特徴的に用いられている)

## 5. 『万の文反古』と『好色一代男』と書簡との比較

『万の文反古』は西鶴の作品の中で、唯一の書簡体という形式で書かれている。そのため書簡体という文体の違いが原因で、他の西鶴作品と品詞の出現率に違いが出ている可能性がある。そのため西鶴の書簡7通を追加し、『好色一代男』・『万の文反古』・書簡の文体比較を試みる。

7品詞の主成分分析(相関行列)の結果が図7である。主成分寄与率は第一主成分では32.7%で、第二主成分では25.06%であり、第二主成分までの累積寄与率は57.76%である。

表11に主成分ベクトルを示した。これをみると、動詞・副詞・連体詞の出現率が大きくなると第一主成分の値は大きくなり、反対に助詞・名詞・助動詞の出現率が大きくなると第一主成分の値は小さくなる。また第二主成分の値は、名詞・動詞の出現率が大きくなると大きくなり、助詞・副詞・助動詞・形容詞・連体詞の出現率が大きくなると小さくなる。

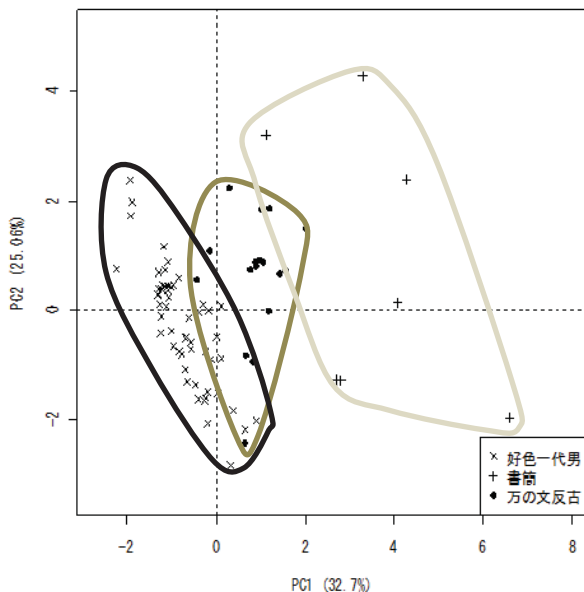


図7 『好色一代男』と『万の文反古』と書簡の主成分分析(相関行列)

この分析の結果から、『好色一代男』の作品になるほど助詞の出現率が高く、書簡になるほど動詞の出現率が高いということがいえる。そして、『好色一代男』と書簡の両方の特徴をもつと考えられる『万の文反古』は、『好色一代男』と書簡の間に位置している。

表 11 品詞の主成分ベクトル

	PC1	PC2	PC3	PC4	PC5	PC6	PC7
名詞	-0.17	0.60	-0.09	0.39	-0.47	-0.37	0.29
助詞	-0.59	-0.20	-0.13	-0.08	0.41	-0.12	0.63
動詞	0.60	0.16	0.20	-0.12	0.03	0.30	0.68
助動詞	-0.11	-0.51	0.47	-0.23	-0.62	-0.20	0.16
形容詞	0.04	-0.13	-0.80	-0.36	-0.41	0.18	0.10
副詞	0.48	-0.22	-0.22	-0.02	0.21	-0.79	0.03
連体詞	0.12	-0.50	-0.16	0.80	-0.08	0.22	0.11
寄与率	32.86	24.71	17.12	10.59	7.34	7.13	0.24
累積寄与率	32.86	57.57	74.69	85.28	92.62	99.75	100

同じデータをクラスター分析法(ウォード法, ユークリッド平方距離)で分析した結果が図8である。図8では、『万の文反古』は○印、『好色一代男』は×印、書簡は+印で示した。この図を見ると、『好色一代男』と『万の文反古』・書簡の二つのクラスターに大きく分類されている。

これらの分析結果から、『万の文反古』が他の浮世草子と異なった特徴をもつのは、書簡体という文体が影響しているという可能性がある。

## 6. 結論

品詞の出現率を用いた主成分分析で『万の文反古』では、動詞の出現率が高いというように『万の文反古』と他の西鶴作とされる22作品では、品詞の出現率に違いが見られることが明らかになった。次に章を分析単位として詳細な作品間の比較分析を行い、『万の文反古』における品詞の出現率は、他の4編の遺稿集(『西鶴置土産』『西鶴織留』『西鶴俗つれづれ』『西鶴名残の友』)に比べ動詞の出現率が高く、助詞の出現率が低いという特徴をもち、西鶴作であることが明確な『好色一代男』の比較においても『万の文反古』は動詞の出現率が高く、助詞の出現率が低いという特徴をもつことが明らかになった。

また動詞と助詞の語彙の出現率を分析し、『万の文反古』は『好色一代男』に比べて、動詞では敬語(尊敬語・丁寧語・謙譲語)の出現率が高く、助詞では、その他の遺稿集に比べて「へ・ばかり・にて・に・は」の出現率が高く、『好色一代男』に比べて「にて・に・へ・ばかり・は」の出現率が高いということが分かった。このことから、言葉の出現率においても2作品で違いが見られるという結果を得た。

このような分析からは、品詞の出現率や語彙の出現率が『万の文反古』と西鶴作品とでは、かなり異なるという結果が得られた。

しかし『万の文反古』は西鶴の作品の中で、唯一書簡体

で書かれているため、書簡体という文体の違いが原因で、『万の文反古』と他の西鶴作品とでは品詞の出現率に違いが出ているという可能性が考えられた。そのため西鶴の書簡7通を追加し、分析を行ったところ品詞の出現率を用いた主成分分析では、『万の文反古』は『好色一代男』と書簡の中間に位置するという結果を得た。さらにクラスター分析を行って見たところ、『好色一代男』の各章はまとまって一つのクラスターを構成するが、『万の文反古』と7通の書簡は一緒になり別のクラスターを構成するという結果が得られた。

したがって、『万の文反古』が書簡体で書かれているために、他の西鶴作品と異なった特徴を示したという可能性

は否定しきれず、今後『万の文反古』の著者に関する疑惑の解明には、書簡体という文章の特徴の詳細な分析が課題として残された。さらに品詞の出現率に加え言葉の出現率等の他の情報も加えた分析、『万の文反古』を出版した門下の北条団水の作品も含めた分析も必要であると考えられる。

### 参考文献

- [1] 森銑三：『西鶴と西鶴本』、元々社（1955）。
- [2] 山口剛：解説『西鶴名作集下』（日本名著全集江戸文芸之部）、日本名著全集刊行会（1929）。
- [3] 暉峻康隆：『西鶴研究ノート』、中央公論社（1953）。
- [4] 中村幸彦：『万の文反古』の諸問題、『中村幸彦著述集第六巻』、p66-97、中央公論社（1982）。
- [5] 浅野晃、他編：『新編西鶴全集第一巻～第四巻』、勉誠出版（2000）。

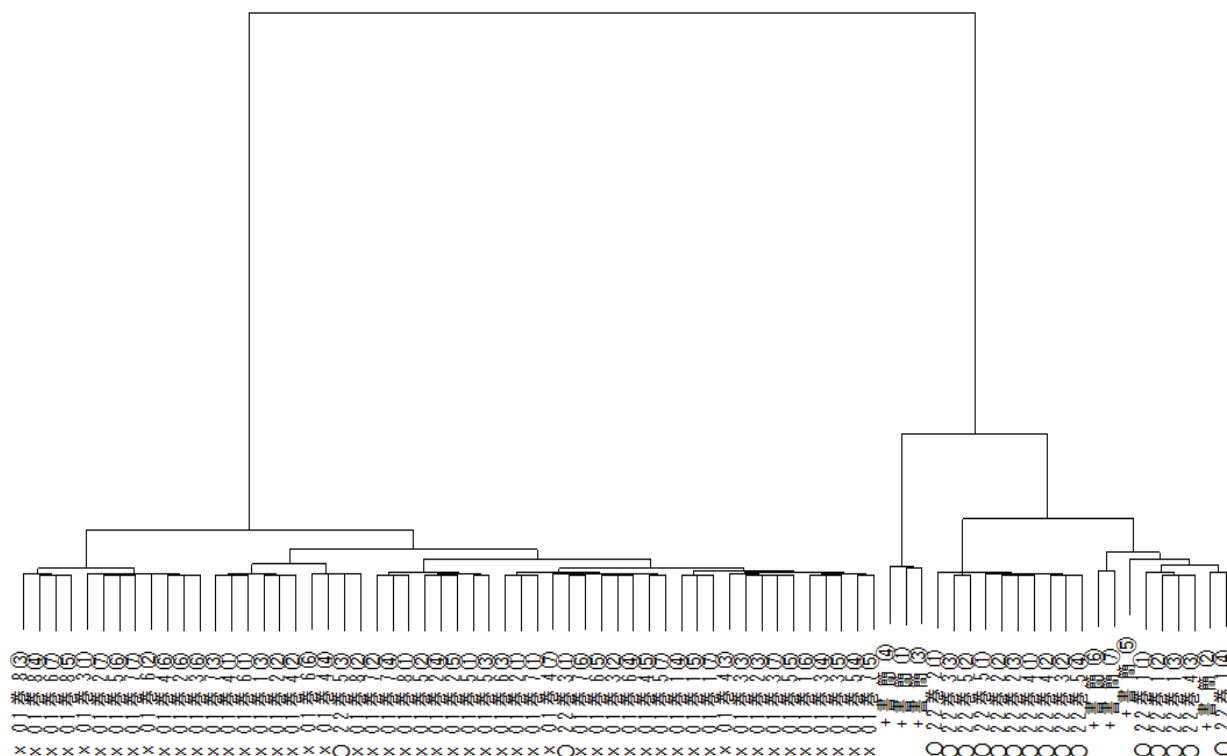


図8 クラスター分析の結果（ウォード法，ユークリッド平方距離）